

ドクター・ハザマの



バイタルサイン塾 33

薬剤師と医師の、患者への関わり方はどこが違うのか

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

陸上競技なら100m走を1日40本!? sprinter 的な薬剤師の業務

バイタルサインの話をし始めた頃、「そんな時間とはれない」、「そんなことよりも、まだ薬剤師にはやるべきことがたくさんある」とよく言われました。一般的な薬局や病院での業務は、処方せんや処方オーダーを応需してから正確・迅速に調剤して、わかりやすい服薬指導とともに、患者さんにお薬をお渡しするというものですから、確かにそういう気持ちもわかります。しかし、医療の現場においてバイタルサインを把握し、それぞれの専門性に基づいたフィジカルアセスメントを行うことは極めて重要なはずなのという気持ちがあったので、何とも言えない違和感を覚えていました。

ただ最近、ふと思ったことがあります。「薬剤師と医師とでは、患者さんへの関わり方が、どこか根本的に異なっているのではないかと」と。そんなことをつらつらと考えていたときに、出てきたイメージが、薬剤師は sprinter ではないかということです。

保険薬局では、薬剤師は原則、処方せん40枚につき1人を配置するように定められています。処方せんを受け取ったら、冗談ではなく1分でも1秒でも早くお薬を調剤してお渡しすることに、注意のほとんどが向いているとすれば、まさに、陸上の100m走の sprinter (図) のように見えませんか？

ゴール（お薬の受け渡し）まで達すれば、またスタートライン（処方せんの受け取り）まで戻るといった繰り返しです。40本全力で走ると、当然疲れます。心地よい疲労感のときもあれば、過重労働になっているときもあるでしょう。しかし、業務を終えて薬局を出るときは、ある程度すっきり、さっぱり（薬歴を書き終えていれば!?) という感じなのかも知れません。

自分のスキルアップは、まさに、走るタイムやフォームを良くするために欠かせませんから、自然と生涯

研修にも熱が入ります。薬剤師さんが真面目に生涯研修に取り組むのは、実は、athlete がトレーニングする感覚と似ているのかも知れません。

■図

100m Dash × 40 !?



© Kenji Hazama, M.D., Ph.D.

医療は短距離走ではなくマラソンの そしてそのランナーは薬剤師ではない

しかし、医療において、走るのは患者さんだと思うのです。患者さんは、疾病の治癒、そして場合によっては人生の終わりというゴールに向かって、黙々と、そして時には大きくあえぎながら走っておられます。それは100mという短距離走ではなく、いわばマラソンのようなものではないでしょうか。医師や看護師は、その患者さんと併走しているコーチのような感覚ではないかと思えます。

患者さんの状態を常にモニタリングして把握しながら（フィジカルアセスメント）、もっと楽に、もっと快適に走れるためにはどのようにしたらよいかを常にアドバイスし、時には直接的に介入しながら、患者さんと寄り添っていきます。1日が終わっても、コーチの役割は途切れるわけではありません。患者さんがゴールに到達するか、他のコーチに引き継ぐまで、患者さんに何かがあれば、自分が何らかの責任を追う立場であり続けるというポジションです。

この微妙だけれども明確な違いは、薬剤師がチーム医療の中で感じる戸惑いの原因になっているのかも知れません。